九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中欧工業化史研究の新たな展望 : 1960年以降の業績を中心に

碓井, 仁

https://doi.org/10.15017/3000117

出版情報：経済論究. 94, pp.31-60, 1996-03-31. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：

中欧工業化史研究の新たな展望
——1960年以降の業績を中心に——

碓　井　　仁

目　次

はじめに
第1節　ハプスブルク経済史の基本命題の成立
1.「失敗テーゼ」「破局テーゼ」の成立とその反省
2.　ボヘミア農村工業史研究の展開
第2節　ハプスブルク帝国の新しい「工業化」像構築の試み
1.　ヨーロッパ経済成長の「縮小版」としてのハプスブルク帝国
2.　産業革命の「オーストリア・モデル」
第3節　「マニュファクチャー」の性格規定をめぐる議論の展開
1.「農奴制が支配的な地域における農村工業の展開」論
2.　再版農奴制下「マニュファクチャーの封建化」論
第4節　チェコ・オーストリア学界の「プロト工業化」論への反応
1.「社会的習得過程としてのプロト工業化」論
2.「地域ベースの工業化」論の再構築
おわりに
参考文献

はじめに

現代の高度な産業社会の歴史的起点として「産業革命」は，従来から経済史学の主要な関心事をなしてきた。しかし，産業社会そのものに対する我々の評価を反映して，「産業革命」に対する見方も，否定・肯定の間を揺れ動いてきており，この点は，イギリスにおける過去一世紀の「産業革命」研究史を四段階に分けて整理したキャナダインの論考からも容易に読み取れる（Cannadine [1984]，道重 [1993]，湯沢 [1992]）。

まず，19世紀末から20世紀初頭にかけての古典的「産業革命」像は，トインビーの「悲観論」によって代表される。当時のイギリス社会の貧困と不安の根

元を「産業革命」に求める見解は，やがてウェッブ夫妻らの社会改良派，マントゥらマルクス主義者によっても批判的に継承される。1920—50年代の第二期は，アシュトン，クラッパムらを中心とする「楽観論」の時期で，1930年代の世界的不況を背景としつつも，景気循環モデルの導入により，将来に対する明るい展望が示された。「高度経済成長」を背景とする第三期は，ロストウの「離陸」概念に象徴される。「産業革命」は，伝統的農業社会から近代的産業社会への転換の画期，つまり持続的経済成長の起点として積極的位置づけを与えられた。また，「産業革命」が先進諸国から次第に世界的規模で波及・継続する過程であるとの認識が高まり，「工業化」概念が選好されるようになるのも，この時期である。しかし，1970年代以降の第四期には，オイルショック，ローマ・クラブによる「成長の限界」論の提示，および，新興工業国の抬頭から，「産業革命」に対する懐疑的見解が顕在化し始めた。また，「最初の工業国家」イギリスの経験も，従来想定されてきた急激な経済変動ではなく，より漸進的な現象として描かれるようになる[1)]。1980年代末以降に関してはさらに，ソ連・東欧型中央統制経済の崩壊，東アジア経済圏の抬頭および欧州統合という新たな状況が加わり，今日に至るのである。

ところで，「産業革命」像の変遷は，イギリスを規範としてきた大陸諸国の「工業化」研究にも影響を与えずには済まなかった。ガーシェンクロンの後発国モデルに代表される「大躍進」の条件追究から離れて，個々の国家・地域の諸条件に相応した発展経路を丹念に辿る研究手法が抬頭したからだ。特に中欧・ハプスブルク帝国圏に関しては，二つの契機から，その「工業化」史の再検討が急務となっている。一つは，「戦後四十五年にわたって本来の経済的交流を妨げてきた障壁がようやく取り除かれたことによって，歴史的な『中欧圏』の復

1)　1960—80年代アメリカ学界の動向を回顧したクァッテルトは，近年の「産業革命」見直しの契機を次の四点に纏める（Quataert [1988], p. 3-6)。第一に，数量経済史の成果による，「産業革命」期の成長率の下方修正。第二に，「産業革命」期を特定することの困難と，科学・技術的変化の漸進性の指摘。第三に，南北問題の拡大に伴う，「離陸」の前提条件への関心の移動。そして第四に，社会史など「下からの歴史記述」の活性化に伴う，資本主義揺籃期の複合的性格の再認識である。

元が意識に上ってきた」(石坂［1992］，35頁）こと。今一つは，欧州統合というより広域的な「地域主義」への傾斜を睨みつつ，ヨーロッパ全体の「工業化」過程の再検討が促されていることである。

もっとも，「中欧圏の歴史的復元」の要請は，現代の経済・社会情勢からに留まらない。学説史的にも，ハプスブルク経済史研究，「プロト工業化」論およびグーツヘルシャフト研究など様々な領域から，中・東欧に特有の土地制度ならびに政治体制下に進行した経済発展を再検討する気運が高まっている。この点は，我国学界も例外ではなく，1960年代の進藤氏を嚆矢として，1980年代には佐藤，御園生両氏により，特に生産の担い手を強く照射した業績が相次いで発表された。今後，対象を絞り込んだ，より「地域」に根差した研究の進展が期待できるのである。

本論では，以上の現代的および学問的背景を念頭に，中欧のハプスブルク帝国，特にボヘミア地方の「工業化」に関する1960年以降の研究動向を追跡する。それにより，実証研究に進むに際しての課題と研究指針を明らかにしたい。

第1節　ハプスブルク経済史の基本命題の成立

1.「失敗テーゼ」「破局テーゼ」の成立とその反省

1950年代中葉以降の経済史研究では，ロストウ，ガーシェンクロンら，持続的経済成長の起点として，「産業革命」を挟む断絶性を強調する「成長史学」が一世を風靡した。ところで，この時期のボヘミア地方を含めたハプスブルク研究史を繙くとき，まず気が付くのは，政治史および文化史の圧倒的優位，それと好対照をなす経済史分野での顕著な立ち遅れである。

経済史研究の遅れは，研究文献での経済の扱い方にも反映されている。概して，1918年の帝国瓦解から回顧的に，その経済的脆弱さの原因を探る立場が支配的で，18—19世紀帝国経済の到達水準を正面から取り扱う姿勢は希薄であった。「離陸」あるいは「大躍進」を契機とする持続的経済成長に到達できなかった事例[2]として，いわゆる「失敗テーゼ」の論議に終始したと言っても過言ではない（Good［1984］，p．1-7)。

ボヘミア地方を対象とした研究も，17世紀以降を「暗黒時代」と捉える「破局テーゼ」(Bosl [1974], S. 326) として特徴づけられる。三十年戦争，特にヴァイセンベルクの戦 (1620年) は，ボヘミア諸身分の自立性の決定的没落と封建反動の強化に帰結した。グーツヘルシャフト＝再版農奴制の諸制約を打破し，資本主義的諸力を解放する契機に関しても，18世紀後半から19世紀中葉の「上から」の制度改革の重要性が強調されたのである。

しかし，1960年代以降，ハプスブルク経済史研究は，新たな方法的視座のもとで顕著な変化を示し始める。それは，1970年代初頭までの研究成果の集成である二つの一般的叙述，『フォンタナ・ヨーロッパ経済史』第4巻所収のグロス論文 (Gross [1973]) と『ボヘミア経済史便覧』第2巻 (Bosl [1974]) からも窺えよう。

既述の『産業革命』研究史の第四期への研究スタンスの変化を色濃く反映したグロス論文は，以下の二点で多大の寄与を行っている。第一に，大陸諸国の多くが必ずしも「大躍進」を経過せず，長期的で緩やかな歩みを重ねてきたことの指摘。近年の欧州統合を睨んだ「工業化」論の再構成に一脈通ずる観点を含み，その限りで，1980年代以降の研究潮流を先取りさえしている。第二に，ハプスブルク「工業化」研究のための基本的視点として，帝国に特殊な初期条件に注目する必要性が指摘される。ハプスブルク帝国は，旧来の「工業化＝国民国家形成モデル」に合致しない，「超 (複合) 国家的」構造を有していた。帝国内部の利害状況の複合性も，一元的に「失敗因」と理解せず，緩やかな調整下での長期的な成長因と捉え直すのである。

『ボヘミア経済史便覧』もまた，従来までの「破局テーゼ」を批判し，次の三点を強調して，1970年代以降の研究の方向性を示している。第一に，グーツヘ

---

2) その要因は，次の三点に集約される。第一に，帝国内の社会経済・地理・政治・宗教・民族的錯綜性に規定され，またそれと絡めて，極端な地域間の不均等発展が同時並存し，持続的経済成長のための諸条件が未成熟であったこと。第二に，重商主義政策 (「ヨーゼフ主義」) にもかかわらず「国民国家」体制の確立が不徹底に終わったこと。そして第三に，17—18世紀の相次ぐ戦禍・領土喪失 (Gross [1973], p. 228-237)。

ルシャフト支配下の農民窮状を過大評価することの反省。第二に，特に山岳部・荒蕪地への入植による17世紀末以降の急激な人口増加。そして第三に，伝統的な都市・商業の停滞のなかでの輸出向け農村工業の成長である（Bosl [1974], S. 321–339)。

2. ボヘミア農村工業史研究の展開

ところで，上述の『ボヘミア経済史便覧』編纂の契機として，1960年代に相次ぎ発表された重厚な農村工業論も見過ごすことができない。この時期，18世紀後半に伝来するマニュファクチャー一覧表（Manufakturtabelle)[3] の精緻な分析から，手工業発展の到達水準・業種別の発展趨勢の把握，生産量・労働力編成・産業立地などに関する豊かな成果が輩出し，その後の研究のための礎石が据えられた。ここではその代表例として，チェコ学界のプルシュ，旧西ドイツ学界ではオトルバとハッシンガーを取り上げ，検討を加えよう。

プルシュは，マニュファクチャーおよび手工業的小商品生産から工場制生産への移行を「産業革命」の中心内容[4] に据え，ボヘミア「産業革命」の四つの時期区分から始める（Purš [1960], p. 189–197)。すなわち，①18—19世紀交から1820年代末の封建的諸関係下での初期段階，②1830年代から1848年「ブルジョア革命」期の発展段階，③1849年から1870年代に至る「二重に自由な賃労働」に基づく資本主義的諸関係の確立期，そして，④1870年代以降の帝国主義

3) 1754年宮廷布告により，ボヘミア手工業全般は，在地市場向けのポリツァイ手工業（Polizeigewerbe）と域外・海外市場向けのコメルツィーアル手工業（Kommerzialgewerbe）に分類された。マニュファクチャー一覧表は，後者を対象として作成された産業統計であり，当時の重商主義思想に裏打ちされ，帝国の国勢把握および政策決定の基準ともなった。その史料としての有効性については，対象の限定，個別項目における統計作成上の混乱など，従来から様々の難点が指摘されている。しかし，18世紀後半ボヘミア経済の到達水準を把握する上で，第一級の史料であることに変わりはない。今日，1766年，1775—98年統計を，オトルバおよびプルシュの研究業績から利用できる（Otruba [1964], Purš [1965])。

4) もっとも，複雑な民族構成をもつボヘミア地方にあって「産業革命」は，純粋に経済的過程としては現象せず，多様な利害の対立・絡み合いの中，特に1870年代の民族運動の高揚と相俟って現れる（Purš [1960], p. 184–185)。

段階である。その上で彼は，「産業革命」の初期段階に注目し，この時期を，封建制下で達成されうるマニュファクチャーの最高段階，つまり，より高次の工場制生産に向けた前提条件の成熟段階と位置づけた（Purš [1965], S. 120–122)。

もっともプルシュは，18世紀後半の封建的諸関係の根強い残存から，真の資本主義的諸関係の確立は第三期を俟たねばならないと強調する。そこから彼の関心は，農奴制廃止（1781年）を頂点とする18世紀後半の諸改革（「ヨーゼフ主義」）が手工業活動および直接生産者に与えた影響の検討に向けられ，それを「かねて展開しつつあった手工業およびマニュファクチャーにおける生産，ならびに，工業の更なる発展のための労働力の開放にとって決定的な意味をもった」（[1965], S. 120）と積極的に位置づける。19世紀の資本主義発展のための地均しとして，内外の危機に瀕した「上からの改革」を重視するのである。その後の研究は，「ヨーゼフ主義」の実効性の過大評価を戒める見解を提示し[5]，プルシュの学説にも修正が必要であろう。しかし，従来看過されてきた工業化「初期史」に注目し，18世紀後半，繊維工業を中心とした域外市場向け手工業の広範な展開を検出した意義は大きい。また，手工業発展にとっての制度的な制約条件の強固さ，裏返せば，資本主義的諸関係の自生的発展の成熟度をめぐる議論が，その後の大きな争点の一つを形成することにもなる。

旧西ドイツ学界では，オトルバが，史料基盤を拡大しつつ，最も精力的にマニュファクチャー一覧表の分析に取り組んだ（Otruba [1964] [1965])。彼は産業別の工業立地を地図化し，その各々の発展趨勢を明らかにした上で，次の論点を提示している。第一に，ボヘミア手工業の発展が非常に緩やかであったこと。生産の重心も，伝統的にボヘミア全土に立地していた麻織物，毛織物およびガラス工業にあり，より多くの付加価値を生む綿工業および鉄・金属加工業は，まだ発展途上にあった。第二に，18世紀後半における企業的活動は，後発国の常として，多くは貴族や教会領主の企業家精神に負っていたこと。彼らは，

5) Dickson [1987], Good [1984], Freudenberger [1960], Komlos [1989] など参照。

自らの所領に定住する領民の潜在的労働力を，問屋制度を通じて最大限に利用したのである。しかし，結局のところオトルバも，近代的な工場制工業への移行は，封建的制約下での生産諸条件が制度変革によって解体された後，初めて可能になったと理解する。この限りで前述のプルシュの立場に近く，19世紀前半に，社会全体への資本主義的諸関係の浸透を認めるのである。しかし，集中作業場以外にも，領主・貴族らによる問屋制に基づく手工業経営を視野に収め，産業部門ごとの発展動向を的確に把握しつつ，手工業が凝集的に分布する「地域」を産業地図化したことは，その後の研究の礎を据えたものとして高く評価できる。

ところで，上に考察したプルシュとオトルバは，いずれも19世紀の本格的「工業化」に向けた一大画期として，18世紀後半の「上からの改革」の意義を強調する。この点を相対化しつつ，農村工業の強靭な活力に注目して研究を一段深めたのが，ハッシンガーである（Hassinger [1961]）。彼は，ボヘミア地方における工場制工業への移行は，18世紀後半の手工業の発展水準の忠実な反映にほかならないとして，それをより積極的に評価した。その際，18世紀に視野を狭く限定せず，中世まで遡及して輸出向け繊維工業の発展，および，多様な形態での熟練労働力養成とに言及した点は，1970年代以降の「プロト工業化」論にも通ずる視点を内包しており，看過できない。特に，ドイツ人が多く入植した不毛な高地部での広範な階層による家内手工業従事の指摘は，この文脈において非常に興味深い。

以上に概観した1960年代の業績は，1970—80年代と比較した場合，理論・実証両面で明らかに限界を示している。特に，ボヘミア工業化史研究において，その分析単位は比較経済史的手法に基づく「国民国家」に留まった。様々な機会に論及された地域間の不均等発展も視野に収め，地域史から問いかけ—手工業活動と封建的諸制度との複雑な絡み合い，地域内の社会構造，内外市場の構造，生産組織・分業関係など—を発するには，1970年代以降の研究成果を俟たなければならない[6]。しかし，「工業化」を地域史の角度から分析する方向は，

6）なかでもフロイデンベルガーは，マニュファクチャー一覧表に基づく研究を「森↗

既に準備されているのである。

第一に，自生的な経済発展の軽視，および制度要因を一面的に強調する姿勢，すなわち「失敗テーゼ」や「破局テーゼ」を克服する試みが指摘されよう。確かにプルシュやオトルバの所説に示されるように，19世紀の資本主義的発展に向けた，「上から」の制度改革を重視する姿勢はまだ根強く残っている。しかし，複合国家ハプスブルクの長期的で緩やかな経済成長の在り方，および，再版農奴制下，農村工業の高い発展潜在力を直視した点は，その後の研究に継承・発展されることになる。

第二に，マニュファクチャー一覧表の徹底した分析による18世紀ボヘミア経済成長の基本趨勢の把握や，産業地図作成の意義は，1970年代以降の研究の貴重な出発点となった。特に，工業化初期史に注意を喚起し，域外市場向け手工業の幅広い裾野をなす家内工業の展開，ならびに，幅広い「工業化」の担い手を探求する契機ともなったからである。

第2節　ハプスブルク帝国の新しい「工業化」像構築の試み

1960年代の研究成果を踏まえて，1970年代以降，ボヘミア・ハプスブルク「工業化」像の再構成の試みが，様々の角度から行われることになる。それは，歴史学方法論の違いを超え，分析単位の変化を伴いつつ展開した点で特徴的である。

まず，グロスの問題提起を受け，ハプスブルク帝国の「工業化」をヨーロッパ全体の経済成長の文脈のなかに位置づけ，よりグローバルな視点から捉え直す接近がある。それ自体，近年の欧州統合を睨みつつ提唱された「地域的＝ヨーロッパ工業化」論（Pollard [1973]，石坂 [1992]）を始め，より広域的な「地域主義」への傾斜に対応するものであり，成長史学の立場から発言するグッドとコムロスに代表される。

↗を見て木を見ない」研究であると批判し，より焦点を絞った経営史の視点，とりわけその内部構造に関わる研究の必要性を訴えている（Freudenberger [1966]，p. 167)。

ボヘミア地方を対象とした研究においても，プルシュによる「産業革命」の四段階論や「破局テーゼ」再検討の気運が高まるなか，手工業生産の到達水準や，資本主義の成熟度を実証的に洗い直す方向も鮮明になった。ここに，「マニュファクチャー」の性格づけをめぐる議論がなされたが，狭義の生産関係に終始せず，次の三点，すなわち，消費財生産部門に限らず，生産手段生産部門まで視野を拡げたこと，封建反動下の多様な労働力の存在形態を実証レベルで明らかにしたこと，および，それを通じて「プロト工業化」論とも重なる論点を提示したことは極めて重要である。

それと平行するように，「プロト工業化」論が研究活性化のもう一方の触媒となった。近代的工業化に先行して農村に広範に展開した家内手工業に注目し，そこで農業・工業・人口動態の相互作用下に繰り広げられる「地域」的な経済社会の変容過程を，本格的な工業化の準備段階と捉え，過去四半世紀にわたって国際的に活発な議論が繰り広げられていることは，周知の通りである。本稿では，ボヘミア・ハプスブルクを対象とした業績から，クリーマ，フロイデンベルガーおよびバルツァレークを取り上げる。

第二，第三の研究は次節以下で検討するとして，本節ではまず，ハプスブルク全体の「工業化」を扱った研究を考察しよう。

1. ヨーロッパ経済成長の「縮小版」としてのハプスブルク帝国

1970年代には成長史学においても，ロストウおよびガーシェンクロン理論のハプスブルク帝国への適用可能性に疑問を投げかける実証研究が現れ始めた(Good [1974] , Gross [1968] [1971])。その対象とする時代は，当初は19世紀に限られている。しかし，マニュファクチャー一覧表および貿易統計を利用した分析（Hassinger [1964]）から，18世紀帝国内諸地域の高い経済的到達水準が確認されるにつれ，帝国の持続的経済成長の起源を更に遡って追究する気運が高まった。グッドが「ヨーロッパ経済成長の縮図」の観点から，ハプスブルク経済史の新たな統合を計ったのも，そうした成果に立脚してのことである(Good [1984])。

グッドはまず，クズネッツの「近代経済成長」概念の援用から，18世紀ヨー

ロッパ全体の経済成長の特質を考察することから始める。すなわち，人口一人当たり産出量，都市化・工業化の進捗度および資本主義の成熟度を「近代経済成長」開始の指標とした場合，西・北では持続的経済成長が看取され，東・南ではそれが見られないという，顕著な東西間の発展傾斜が検出される。その上で，18世紀に続く二世紀間は，北西ヨーロッパで創出された「近代経済成長」の推進力が，発展傾斜に沿って緩やかに東・南方に普及する過程と理解される。

ハプスブルク帝国も，重商主義政策と西欧諸国からの波及効果という内外要因により，18世紀後半には「近代経済成長の初期局面の特徴である構造・制度上の諸変化を経験していた」(p. 34)。ナポレオン戦争による一時的中断の後に帝国経済は，第一次世界大戦まで持続する成長を開始する。すなわち，帝国の「近代経済成長」は，他の西欧諸国やアメリカ合衆国とほぼ同時期に始動したのである[7)]。

もっとも，この現象は，帝国西側世襲領に限定される。ヨーロッパ大陸の心臓部に位置するハプスブルク帝国は，その広大な版図内にヨーロッパ大陸全体の発展傾斜を内蔵し，いわばその「縮小版」をなしていたからだ。しかし，帝国西側世襲領に地歩を確立した成長の諸要因は，より後進的な東側世襲領にも不断に伝播し，19世紀を通じて東西間格差の漸次的な収斂に向かった。

グッドにあっては，傾斜解消の契機に関して，内的発展の推進力などの肝腎の問題が残されている。しかし，帝国の内的複合性に起因した発展傾斜を前提しながら，長期の制度変革と外部からの衝撃の波及効果も考慮しつつ，帝国内の経済成長の「東漸」論を提示した点に，彼の学説の新しさがある。それを通じて，先験的に中核・周辺・半周辺の「硬い構造」を設定し，それに見合った特質を検出するという，ウォーラーステイン流の硬直的な接近視角からも免れ

---

7) 関税同盟成立と農民解放を軸とする19世紀中葉の諸改革の経済的意義も，ここでは大きく相対化される。制度改革の長期的効果の数量化・モデル化が容易でないことを留保しつつもグットは，「一般的なレベルで1848年は，帝国内での封建的諸制度の資本主義的諸制度による代替の画期を示しているようには思われない」(p. 94) と結論づける。同様の主張はコムロスによっても提示されている (Komlos [1983])。

ているからだ[8]。今日のヨーロッパ統合の視点から言えば，「縮小版」ハプスブルク帝国の経験は，不均等発展と地理的条件にも規定された，異なった役割分担という複合的な利害状況のもとでの調整，行きつ戻りつしながらの緩やかな成長の典型例として浮上してくるのである。

2. 産業革命の「オーストリア・モデル」

コムロスの当初の問題関心は，グッドと同様，クズネッツの「近代経済成長」概念を援用しながら，19世紀ハプスブルク経済を再検討することにあった(Komlos [1983])。83年著書で彼は，19世紀の農・工両部門の包括的統計分析から，1830年代のオーストリア，特にボヘミア地方における高度な工業化の進行を指摘する。しかし，その後，「近代経済成長」開始の二つの明示的な指標，すなわち持続的人口成長と一人当たりの産出量増加を近代固有の現象と見なす姿勢への疑問から，新たな「産業革命」モデルを模索するに至る（Komlos [1989])。

89年著書におけるコムロスの「産業革命」概念の基本支柱は，次の二点に集約できよう。第一に，「産業革命」が中世以来のヨーロッパ全体における連続的発展の一つの到達点をなし，18世紀の経済的高揚も，サイクルを辿りつつ進行した発展の一局面に過ぎないこと。第二点は「産業革命」の「産業革命」たる所似として，「マルサス的人口の罠」からの脱却，換言すれば，人口扶養力の決定的上昇が強調される。その際コムロスは，マルサス的人口循環のボトルネック突破の手段として，農工分離＝市場経済の推進力（イギリス型）と農工兼業による食糧調達（ハプスブルク型）とを区別し，人口成長と両立する経済成長のメカニズムを，農工間の労働力配置の変化に注目して追究した。

しかし，コムロスの場合も，ハプスブルク型「産業革命」の直接の引き金は，18世紀後半の制度改革を梃子とした帝国内の農工分業の徹底，それによる一連

---

8) ハンガリーの経済史家ベレンドとラーンキによる，ヨーロッパ周辺地域の産業化を分析した論考においても同様のアプローチが採用されている。彼らは，先進国と後進国との関係を決して硬直的に捉えず，周辺における産業化に対して内在的条件が果たした役割を重視する（Berend／Ránki [1982]，邦訳177–178頁)。

のメカニズムの作動として構想されている。すなわち，18世紀中葉，農業における限界労働生産性の低下に伴う栄養状態の悪化（マルサス的生存危機）の克服を図るべく，当局主導の農工両部門に跨がる徹底した制度改革と，工業化政策が導入された。それを通じてボヘミア・低地オーストリア地方では，労働力の部門間移動，季節的失業の効率的利用が可能となり，工業部門の成長が達成される。同時に，「後背地」ハンガリーの存在が，廉価な余剰食糧との交換による，社会的分業の深化と人口成長の並進を可能にした[9]。そこに生まれた国内市場の拡充が，18世紀末には，地域間の経済的平準化に導いたという[10]。

以上のようにコムロスは，生活水準・人口扶養力の推移と制度改革の対応関係を明らかにしている。この手法の有効性については，「政策決定史観」とでも表現される「上からの道」の一方的強調も含め，今後の検討が必要であろう。しかし，クズネッツの「近代経済成長」概念を俎上に載せ，次の点に注意を喚起したことは，コムロスの最大の業績に属する。第一に，高度な工業化を所与の前提とした「近代経済成長」開始の指標は，近代に固有の現象ではなかった。その限りでコムロスは，サイクルを辿りながら進む経済成長の一齣として，「産業革命」の連続性を主張する。第二に，18世紀人口成長を中世以来の「マルサス的人口循環」のなかに位置づけ，かつ，その克服を「産業革命」の中心課題に据えた。この点，「プロト工業化」論と同じく，広域的な分業関係に節合した農村工業による人口扶養力の上昇を照射し，長期的な農工兼業の意義を改めて問うものとして注目される。

9）人口圧に対する反応は，経済の到達水準，および政策立案者の裁量の程度に応じて異なる。ハプスブルク帝国では，絶対主義的重商主義によってマルサス的危機が回避される。対照的にイングランドでは，既に自律的市場拡大プロセスが開始していたため，当局による介入の意義は少ない。アイルランドはイングランドに対する食糧供給地と化したため，またフランスは後背地欠如と重農主義への固執のため，マルサス的危機が到来した（Komlos [1989], p. 174–176）。

10）地域の帝国構造への収斂を論証するにあたってコムロスは，生活水準の代理変数として，常備軍兵士の身長に関するデータを駆使して接近するという，全く独自の方法を活用した。そのデータによれば，18世紀中葉に帝国の東西間で顕著な格差を示した身長が，帝国内市場統合の進展に伴い，漸次，平準化に向かうという。同様の手法は，他の諸国を対象としても活用されている（Komlos [1994]）。

ただコムロスの関心も，特定地域でなく，帝国全体の「産業革命」の「オーストリア・モデル」としての再構築と，ヨーロッパ全体の工業化への位置づけに向けられている。今後，18世紀後半の制度改革を要請した社会経済的変化を，分析単位を一段下げて「地域」レベルで追究することが課題となろう。それを通じて，農工兼業が生産単位としての農民家族，および地域的な社会経済・制度に与えた影響を，生活水準のみならず，より広い歴史的文脈のなかで捉え直すことが可能となるからである。

本節の冒頭でも触れたように，近年の欧州統合を睨んだ欧米学界では，地域あるいは国家間の不均等発展を前提にしつつ，その歴史的調整過程の的確な把握が課題とされている。ハプスブルク帝国経済史も，「失敗例」としてではなく，複合利害を調整しつつ達成されたバランスのとれた緩やかな成長パターンとして，より積極的に評価されるに至った。その点，帝国の経済成長の漸進性を積極的に捉え直したグッドとコムロスが，この学界動向に大きく寄与したことは疑いない[11]。ところで，両者に共通するのは，ボヘミア地方における「工業化」を，帝国の持続的経済成長の出発点に据えていることである。そこで次節以下では，ボヘミア地方の「農村工業」「プロト工業化」論に対象を絞り，「地域」的な成長メカニズムに関する議論を概観しよう。

第3節 「マニュファクチャー」の性格規定をめぐる議論の展開

16世紀以降，特に三十年戦争を境に，エルベ以東地域で「再版農奴制」の確

11) ヨーロッパの工業化それ自体の漸進性が強調されるに従い，ハプスブルク帝国が経験した長期的で緩やかな経済成長が逆に，ヨーロッパ工業化の典型例とも見なされつつある（Tilly, et al. [1991], p. 664-667)。他方で，ガーシェンクロンの後継者を中心に，「失敗テーゼ」も根強く主張されている。例えばジャクソンは，今日のハプスブルク後継諸国家の緩慢な GDP 成長の原因を，中世末期に遡及して考察している。それによれば，低い農業生産性と都市・手工業の脆弱さ，政治面での旧支配者層の影響力の保持，および，「経済人」の抬頭を促す理念の欠如が，ドイツと異なり，銀行・カルテル・国家による後進国型の工業化過程を阻害したという（Jackson [1994], p. 291-293)。

立に向かう封建反動が強化され，それが学説史上，資本主義発達の最大の阻害要因と見なされてきたことは，周知の事実に属する。もっとも，このような制度条件下の手工業の発達水準，資本主義関係の成熟度をめぐり，マルクス＝レーニン主義史学内で見解の相違が見られる。本節では，1970年代のいわば「マニュファクチャー」論争において，各々「労農」「講座」の立場に比肩しうるクリーマとミシュカに焦点を当て，その議論を概観しよう。それを通じて，「二重に自由な労働者」の成立を指標とする硬直的な議論から，理論と実証を擦り合わせる方向，角度を変えれば，「プロト工業化」論の問題群と重なる論点の浮上を明らかにできるからである。

1. 「農奴制が支配的な地域における農村工業の展開」論

クリーマは，1955年の重厚なマニュファクチャー研究の上梓（Klíma [1955]）以来，一貫して「再版農奴制が支配的な地域での農村工業」の多面的考察に取り組んできた。この点は，「封建制から資本主義への移行」問題と絡めた，1962年エークス・アン・プロヴァンス第2回国際経済史会議での報告（Klíma [1965]），および，近年の『ヨーロッパ社会経済史便覧』第4巻への寄稿論文（Klíma [1993]）からも読み取れる。

クリーマの出発点は，北部ボヘミア山岳地帯にあって広範に展開していた麻織物工業を中心に，再版農奴制のもと，手工業経営の辿る独自の発展経路の考察にある。その第一段階は，16世紀以来西南ドイツ商業資本の市場支配を基礎にした「ツンフトカウフ」[12] の時代にまで遡る。都市・農村間の織布・紡糸の工程間分業が確立したのもこの時期である。

三十年戦争を境に，その根本的編成替えが進んだ。「ハンブルク商人の時代」と総称されるこの新たな段階は，都市工業の衰退を受けて抬頭した，農村を基盤とするボヘミア手工業の自生的発展によって特徴づけられる。そこで要の役割を担ったのは，隷農身分から身を起こした在村の富裕層である。彼らは，いわゆる「麻糸集配人 Garnsammler」として紡績・織布工を支配し，彼らのな

12）「ツンフトカウフ」については，馬場 [1993]，諸田 [1981] を参照。

かからは，外国商人の代理人，後には直接海外取引に従事する商人も抬頭した。それと平行して，内外商人・貴族層による漂白場建設の動きも活発になる。

他方でクリーマは，「麻糸集配人」のもとに組織化された農村手工業者を，グーツヘルシャフト下の諸制約を留保しつつも，賦役制に還元できない「賃労働」の概念で捉える。彼らは社会の深部まで浸透し，広範な「賃労働者」層を形成した[13]。以上の社会的出自を問わない企業家，および労働者層の形成という社会経済的変化のなか，18世紀後半には既に，マニュファクチャーは封建的諸関係が介在する余地がないほどの成熟度を示していたという（Klíma [1967] [1989]）。

このクリーマの所説は，西側歴史家との幅広い交流や学界参加とも相俟って，早くから知られるところとなり，特にそれは，「プロト工業化」論争において顕著である。彼は，旧東ドイツのシュルツと同様（Schultz [1983]，田北 [1987]），「封建制から資本主義への移行」期のマニュファクチャー全般に関する研究成果を，「プロト工業化」論に集約し，それを次の五点に纏めた。

第一に，零細農および土地無し農に対し，所得補完のための稼得機会が創出されたこと。彼らは，19世紀に麻織物工業が衰退し始めると，繊維工業の変動に選択的に対応しつつ，次第に産業プロレタリアートに転化した[14]。第二に，梱包，運搬などの関連職種における雇用が増大し，分業が深化したこと。第三に，外国人手工業者の招聘による熟練労働力の調達とノウハウの蓄積。第四に，生産・販売組織の要の役割を果した「麻糸集配人」から，本格的「工業化」を担う企業家層が形成されたこと。そして第五に，企業家・労働者双方にとって足枷となった封建的諸規制も，こうしたマニュファクチャーの展開に伴い，1781年「農奴解放」勅令発布よりはるか以前に弛緩し，もはや生産力発展の決定的障害たり得なくなっていたことである（Klíma [1974]）。

13）クリーマにとり，「賃労働者」の存在は都市と農村の区別に関わりなく，繊維工業以外にも，17世紀中葉以降の鉱山およびガラス工業における広範な「賃労働」の存在を強調する（Klima [1993]，S．704–705）。

14）18世紀末から19世紀初頭にかけての繊維工業の隆替については，Wolff [1979]，御園生 [1983] を参照。

以上のクリーマの主張は，歴史人口学・家族史の成果を網羅的に摂取した「プロト工業化」研究の現状から見れば，物足りなさは禁じ得ない。しかし，マニュファクチャーを核とした地域的な経済社会の変容の観点は，次節のフロイデンベルガーの所説にも通ずる。また，農村工業の発展におけるグーツヘルシャフト・グルントヘルシャフト地域の違いを一方的に強調[15] せず，封建制の外皮を「下から」打ち破りつつ抬頭する領民層を照射した意義は見逃せない。「プロト工業」の直接生産者を，産業プロレタリアートの先行・初期的形態と短絡的に考えず，彼らの生活の再生産に目を向ける限り，クリーマの業績は「プロト工業化」論争にも多大の貢献をなしている。

2. 再版農奴制下「マニュファクチャーの封建化」論

マニュファクチャーの技術的編成（生産力基盤）に力点を置いたクリーマと対照的に，剰余労働の搾取関係における経済外的強制の強い作用（生産関係）に注目し，グーツヘルシャフト構造の重要性を前面に押し出したのが，ミシュカである（Myška [1979]）。ミシュカは，生産手段生産部門（鉄工業）の集中マニュファクチャーを素材に，16—17世紀交以降の封建領主による企業経営に焦点を合わせ，再版農奴制，原蓄の遅れ，および労働市場の未整備という状況下での，中・東欧に共通するマニュファクチャーの特質を描き出した。そのために彼は，マニュファクチャーにおける所有者と労働者との間の搾取関係を，14世紀にまで遡及し，時代を追って厳密に追究する。

彼は，14—16世紀の自由な労働市場に基づく「資本主義的経営」が，その後，領主所領経営への統合を契機に進む「マニュファクチャーの封建化」を力説する。この過程で，熟練工（鋳造工・鍛造工）の多くが「自由な賃労働」関係を維持したのに対し，補助労働者の労働は，賦役に端的に示される，多様な形態

15) シュレージェンとラインラントの工業発展の経路を比較検討したキッシュの見解に代表される。彼は，前者での「工業化の挫折」と後者での順調な工業化の進行という発展趨勢の乖離の原因を，社会的枠組，すなわち封建支配の在り方の差に求めている（Kisch [1959]）。またクリーテらネオ・マルキスト三人組も，封建的諸関係の弛緩を「プロト工業」展開の前提とも考えている（Kriedte, et al. [1977], S. 26-27）。

の強制労働に転化した。ここに，熟練工＝「自由」労働，補助労働者＝強制労働の二重構造を備えた，「混合型」マニュファクチャーが鮮明な姿を現し，この基本的特質は，1848年ブルジョア革命まで続くのである。その間，賦役など経済外的強制体系の弛緩はあるが，それをクリーマのように，「賃労働」の範疇に分類してはならない。賃金形成自体に領主裁判権が強く作用し，経済法則に則った関係でないからだ。ちなみに，熟練工もまだ領主の法・慣習に係留されており，領主権から完全に自由だったわけではない。

以上の議論においては，生産手段生産部門と消費財生産部門の違いもあって，その主導者は，領主・農民と異なっている。しかし，いずれの論者にあっても，もはやグーツヘルシャフト支配下の労働力に対して，一元的に「不自由」の烙印を押す姿勢は後退している。この点は，クリーマに限らず，マニュファクチャー内での生産関係の規定的枠組みを強調しつつも，それを「混合型マニュファクチャー」と定義し直したミシュカの議論からも窺えよう[16]。そして最近のグーツヘルシャフト研究も，このような軌道修正を強く迫っている。

その最新の成果については別の機会に取り上げることとし，この場では次の点のみを強調しておこう。「非農耕型」グーツでは，既に三十年戦争以前に賦役から賃労働への移行が生じ，広範な手工業展開と内部市場形成は，「農耕型」グーツとの分業関係を形成するに至った（Čechra [1995], Kaak [1991]）。勿論，その後の封建反動により，一部で賦役再編が起こったことは否めない。しかし，1970年代の研究の多くが明らかにしたように，「賃労働」は強靭な生命力を発揮した。そして，この点で山岳地域での農村工業の成長を力説したクリーマらの業績に注目したい。元来，農業経営に適合しない地理的条件下のグーツでは，賃労働関係の長期にわたる存続を窺わせているからだ。もっとも研究の現段階においては，労働力の存在形態を地理的に決めつけることはできない。

---

16) ミシュカと同じく鉄工業を分析したインドラは，更に一歩踏み込み，領主直接経営と間接経営の相違のなかに，生産関係の変化を示唆する（Jindra [1974], S. 278）。また同じ集中的経営であっても，ガラス工業においては，小商品生産者層の「下から」の自由な発展の余地が広く認められている（Klíma [1984]）。

「マニュファクチャー」の性格規定をめぐる議論も，このグーツヘルシャフト研究ともども，「プロト工業化」論に通ずる地域レベルの研究を要請していること（Cerman [1993], Rudolf [1980]），それと絡めて，既存の農業諸条件や生産組織，内外の市場構造とも関連する「グーツ類型」論も浮上してくることを確認しておきたい（Millward [1984]）。

第4節　チェコ・オーストリア学界の「プロト工業化」論への反応

1960年代以降の社会史・家族史・人口史の成果を広く摂取しつつ，「工業化」の起源論に大いに貢献したのが「プロト工業化」論である。理論の提唱者であるメンデルスによれば，それは「地域内における農村工業，域外市場，および農村工業と商業向け農業地域との共生的発展，の三構成要素の同時的形成」（Mendels [1982]，邦訳107頁）と概念づけられ，「上述の諸特徴の組み合わせは，それが見出される地域を産業革命に向けて押し進める傾向をもつか，少なくとも機械の採用を促進した」（同上108頁）とされる[17]。

ところで，チェコ・オーストリア学界は，アメリカ・ドイツおよびフランス学界と異なり，理論を継承・発展させる方向で反応したわけではない。むしろ，論争のなかで明らかとなった理論の意義と限界を見極め，独自の対案を提示することで特異な対応を見せた。特に，メンデルスらのテーゼに込められた単線的発展論を俎上に載せ，地域レベルの社会・経済・制度・文化・生活の変容過程を「全体史」として再構成する最近の潮流[18]と重なる論点を先取りして提示さえしている。特に，1960年以降「工業化の先行条件」に目を向け，そこで得られた重厚な農村工業論の成果を手に，多くの論者が「プロト工業化」論争に参加した。本節では，先に取り上げたクリーマを除き，フロイデンベルガーとバルツァレークの所説を取り上げよう。

17）「プロト工業化」論争については，Clarkson [1985]，Coleman [1983]，Kriedte, et al. [1977] [1992]，Mosser [1981]，Schremmer [1981]，斎藤 [1985]，篠塚・石坂・安元 [1991]，田北 [1987]，二宮 [1984] など参照。

18）Berg／Hudson [1992]，Pohl [1986]，田北 [1996] など参照。

1. 「社会的習得過程としてのプロト工業化」論

フロイデンベルガーは「プロト工業化」論争への参加に先立ち，1960年代後半に，経営史の観点から独自の「プロト工場」理論を練り上げているので，その紹介から始めよう（Freudenberger［1966］［1968］）。

フロイデンベルガーは，18世紀を通じて皇帝，貴族らによって設立された集中作業場を，近代的工場と基本的特徴を広く共有する「原初的（プロト）工場」と捉える。この「プロト工場」とそれに先行する手工業的企業形態との分離線は，以下の三点に求められる。第一に，多数の労働者を擁する集中作業場として，マルクスの「マニュファクチャー」概念に近い形態で分業が組織化されていること。第二に，生産される商品は工場監督者によって規格化され，域外市場への適正が管理されること。第三に，経営に関する意思決定と経営管理は，少数の監督者に委ねられ，対照的に労働者はそこから完全に排除されること。すなわち，経営・企業家機能が固有の生産部面から分離し，経営管理が間接的方法に移行したことを「プロト工場」の必要条件として挙げ，そして，このような「プロト工場」こそが，新しい企業経営のための訓練場となったのである[19]。

しかし，その概念は，個々の集中作業場に限定される，狭義の「経営近代化」の文脈のみで構想されたわけでない。むしろ経営風土論として，地域社会全体の編成替えの「発信源」も含意している。彼は，「プロト工場」で形成された労働規律・生活リズムの食糧・原材料供給者，多様な補助労働者および商人への伝播・波及によって，地域の経済社会に惹起される変化や分業の深化を，「社会的習得過程」の概念で捉えた（Freudenberger［1981］）。

この概念が，企業家・経営者・監督者と対をなす，労働大衆の側からの社会史的成果と絡めつつ再構成する必要はあろう。しかし，「プロト工業化」論が織

19） 領主の集中作業場建設の動機が，ブルンナーのいう「全き家」の理念に動かされたものであったとしても，絶対主義的重商主義期「特権マニュファクチャー」の積極的側面を照射した点は見逃せない。従来の我国学界においてみられるように，一括して封建的遺制あるいは中世的なツンフト共同体それ自体の転化形態と見なす視角に対しても，一石を投じたものと言えるからである。

維工業を対象に，問屋制度を紐帯とした農村家内工業＝分散的組織に論議を集中してきただけに，集中的組織の意義を考える上で重要な寄与と言わなければならない。また，この概念を前節での議論と絡めて位置づけるとき，「農業社会内部における社会的習得過程」（同上，邦訳323頁）の進行にとって，封建的諸規制の制約度やその弛緩・再強化の問題も浮上してこよう。その意味から，狭義の「プロト工業化」論に限らず，広い応用可能性をもっている。ピックルによるシュタイエルマルク鉄工業研究に「社会的習得過程」論が広く採用されていることが，その一例として挙げられよう（Pickl [1986]）。

2. 「地域ベースの工業化」論の再構築

「プロト工業化」を本格的工業化の準備段階として単線的に理解せず，より広く「手工業地域」の一類型に位置づけ，独自の地域ベースの工業化論を提示したのがバルツァレークである（Baltzarek [1979]）。その理論は，カウフホールト（Kaufhold [1986]）やシュトローマ（Stromer [1986]），バーグ・ハドソン（Berg／Hudson [1992]）らの提唱した見解を先取りする観点を含み，「プロト工業化」論の批判的継承の一つの方法として，今後の有効な研究指針と考えられよう。

バルツァレークは，ガーシェンクロンによる後発資本主義国の「工業化」モデルを下敷きに，顕著な地域間不均等発展のもとでの「工業化」の複合的経路を論じた。その際のキー概念をなす地域を，「先進地域」「追随地域」「保守的地域」「停滞地域」「後進地域」に分類し，「先進地域」に牽引された工業化の始動と波及の過程を追究するのである。この旧ヨーロッパ「先進地域」には，次の三類型が挙げられている。第一類型は，域外および海外市場向け手工業地域，第二類型は鉱山，およびそれに隣接して立地する金属加工業地域，そして第三類型は，消費中心地として生産を促進し，かつ，生産・流通の調整機能を果した首都・居城都市地域である[20]。

20）「先進地域」の対極をなす「後進地域」についても類型化されている。①中・東欧のグーツヘルシャフト地域，およびフランスの「全き家」に刻印された純粋な農業地域。②森林・山岳地帯の農村地域。ここでは確かに封建的諸規制が弛緩し「プ↗

ヨーロッパ工業化期に固有の発展は,「先進地域」内で作り出された社会・経済的諸力と域外市場向けプロト工業との節合，その追随・保守的地域への波及効果による自生的な「全き家」構造の解体と内部市場の形成・拡大，以上の焦点での国民国家の形成と国家の経済政策による資本主義の一層の前進，こうして達成される社会・経済的発展の長期的な連続性にあった。ここで波及するのは，狭義の「プロト工業化」の枠には収まらない，インフラ，法制度なども含まれ，既述のフロイデンベルガーの「社会的習得過程」に通底する観点がある。もちろん，先行条件の充実は必ずしも,「工業化」の十分条件ではない。しかし,「先進地域」の工業化の遅れが僅かに留まるのに対し，新たな先進地域の創出には，先行条件の代替物（旧「先進地域」の模倣など）形成に時間を要する分だけ，大きな遅れを伴うことになる。

ところで，工業化の開始・速度，およびその形態は，国民国家内の複合的な地域構成に応じて異なっている。海外市場依存型の手工業地域（第一類型の「先進地域」）を保持した国民経済が最も急速，かつ順調な発展を示した。それと対照的に，国内市場依存型の国民経済，第二および第三類型の「先進地域」に限定された国民経済，ならびに，原料輸出型の貿易構造をもつ国民経済は，国家の育成政策を通じてのみ，極めて緩慢に工業化を経験した。この型に属するのがハプスブルク帝国で，その内的複合性が順調な展開の阻害要因として作用し，他方で,「先進地域」三類型が相互に絡み合うイングランドが，最も順調に工業化を経験した例として位置づけられる。

裏返して言えば，帝国の構造的弱点が強く意識され,「失敗テーゼ」に囚われているとも見なせる。その限界は，メディックの「プロト家族」(Medick [1976]) の下敷きとなった「全き家」概念の継承からも容易に看取できる。労働力を含めた商品市場の欠如を前提に，変化の起点をもっぱら外圧に求めることになるからだ。「地域」の内部構造に光を当て，そこから経済・社会・法制・文化的変容の足跡を辿る「手工業地域」の接近視角が必要な所以である。

↘ロト工業」が成立した。しかし旧「先進地域」との節合は困難であり，本格的工業化の過程で「挫折」か再農業化を経験した。③「中核」への原料供給に特化した鉱山地域。

しかし，バルツァレークの積極的寄与を見落としてはならない。それは次の四点に纏められよう。第一に，不均等発展が顕著な地域間のせめぎ合いによる，社会的分業の進展と国民国家への凝集化を構想したこと。第二に，「プロト工業化」を，「先進地域」を起点にした工業化の促進的契機の一つとして捉え，平板な農村工業論を越える視点を提示したこと。第三に，繊維工業に加え，生産手段生産部門も視野に収め，地域的工業化の射程を伸ばしたこと。そして第四に，国境線・関税線を越えて交差する複雑な分業関係の存在，その分離・統合といったダイナミズムを明らかにしたことであり，特にこの視点を継承しつつ，ヨーロッパ全体を一つの「地域」に設定し，そこでのハプスブルク帝国の「工業化」の経路を論じたのが，グッドとコムロスなのである。

おわりに

本稿では，近年の内外学界を貫く「産業革命・工業化」研究の新たな胎動を念頭に，中欧のハプスブルク帝国・ボヘミア地方の「工業化」に関する研究史を1960年以降につき検討してきた。「中欧の復権」を境に，欧州統合との関係を踏まえた「新たな産業社会」への移行が今日急務とされ，また学説史的にも1970年代以降の新潮流に照らして，「工業化」像の見直しが要請されているからである。最後に，本論の構成に沿って主要な論点を要約しつつ，今後の実証研究の課題と接近視角を明らかにすることで，本稿の結びとしたい。

まず指摘しなければならないのは，1960年代以降の研究スタンスの根本的転換であり，端的には「失敗テーゼ」「破局テーゼ」からの脱却と表現できる。その根底には，ハプスブルク研究における政治・国制・文化史偏重から，社会経済史も含めた総合的考察への移行があった。「マニュファクチャー一覧表」を史料基盤にした重厚な実証研究の蓄積が，その後の方向を決定づけたことも再確認しておきたい。したがって，グッド，コムロスら成長史学の代表者，クリーマ，ミシュカらマルクス＝レーニン主義史学の歴史家，さらにはフロイデンベルガー，バルツァレークら独自の「プロト工業化」モデルを提示した経済・経営史家たちが足並みを揃えて，「失敗テーゼ」に代わる新たな観点を打ち出した

ことも，決して偶然ではない。

グッドとコムロスは，ロストウ，ガーシェンクロン流の成長史学モデルのハプスブルクへの適用の限界を銘記し，ヨーロッパ経済成長の枠内にハプスブルクが占める位置づけを明らかにしている。グッドは，ヨーロッパ経済に存在する経済成長の東西傾斜に注目し，ハプスブルクをその「縮図」と捉える観点を提起した。またコムロスは，オーストリアと「後背地」ハンガリーの分業関係の深化に基づく「マルサス的危機」の最終的克服過程を「産業革命」の中心課題に据え，農工兼業の所得効果と関連づけて説明した。ここに，イギリス型＝農工分離に対比される，オーストリア型＝農工兼業の積極的意義を照射したのである。これらは，近年ポラードらの強調する「地域的＝ヨーロッパ的工業化」論に通底する観点を含むが，より地域を絞り込んだ研究による裏付けが必要なことは間違いない。

マルクス＝レーニン主義史学内における「マニュファクチャー」の性格規定をめぐる議論も，実証研究の進展に伴い，三十年戦争後の封建反動と「暗黒時代」テーゼへの反省をもたらした。クリーマ，ミシュカと力点の差こそあれ，グーツヘルシャフトという土地制度や政治構造の硬直性を一方的に強調する立場から離れて，生産手段生産部門と消費財生産部門とを問わず，制度制約下の内発的発展の可能性が明らかにされたからだ。特にクリーマは，「プロト工業化」論争にも積極的に発言し，再版農奴制下の「下から」の生産力発展を重視し，出自を問わない企業家層の抬頭と，単なる資本＝賃労働関係に還元されない広範な農民層の形成を指摘した。これらとは別系譜で始まったグーツヘルシャフト研究も，固い構造としての「グーツ」テーゼに反省を迫る成果を輩出している。もっとも，賃労働から賦役への反転も一部で生じており，その成果の要約には慎重を要する。しかし，グーツの制約をおしなべて強調することは，もはや許されず，この点でも，「グーツ」の地域類型をも睨んだ「手工業地域」研究による再検討が俟たれる。

それと踵を接して，1970年代以降の「プロト工業化」論が，「地域」レベルの緩やかな工業化論再構成に拍車をかけた。フロイデンベルガーは，経営史の道具立てとして展開した「プロト工場」概念を，より広く，地域全体の社会経済・

法制・文化的変容過程の分析に適用し，「農村社会内部における社会的習得過程」としての接近方法を確立した。バルツァレークは，ガーシェンクロン・モデルの遡及的適用から，「先進地域」概念を軸に，地域間の不均等発展の収斂，相互依存強化による緩やかな工業化像を提示し，最新のイギリス社会史の成果をもとに提唱される「手工業地域」論にも繋がるのである。

今や，18世紀ハプスブルク・ボヘミア経済は，広大な版図内の，複合的利害状況調整下の緩やかな成長過程と捉えられている。それを踏まえつつ，同時に，上記三つの研究分野が共通して示す，「地域」レベルの実証研究による理論再構成が俟たれている。幸い，その際の「叩き台」となる研究・史料が近年発表されているので，一言しておこう。

まず第一に，ボヘミア・ハプスブルク経済の長期的で緩やかな経済成長の再評価から，その持続的成長の起点を，1848年や1781年という制度改革の画期から遡り，「工業化」に至る条件整備の過程を追究する研究が活性化している。なかでもスヴォボダは，貿易統計の分析から1730—40年代をボヘミア経済の分水嶺と捉えた（Svoboda [1991]）。しかし，ここでの問題はむしろ，内外の国家的危機が顕在化したこの時期，地域間分業関係の再編と制度改革の開始を促した，社会経済的諸条件を問い直すことにあろう。

この問題とも絡めて，第二に，「地域」に係留された労働大衆の視点に基づく「工業化」過程の洗い直しに不可欠な史料集も，ドーントにより編纂・刊行された（Donth [1993]）。「北・東ボヘミア山岳地帯の手工業定住の代表的事例」をなす手工業村落ロホリッツおよびハラックスドルフに関する史料集がそれである。その分析を通じて，本稿で考察した様々の次元での論争全般を俎上に載せ，「手工業地域」の観点から「地域」全体の社会構造，およびその変容過程を見極めることが筆者の課題となる。

参 考 文 献

（省略形）
BHR.→*Business History Review*.
BohJb.→*Bohemia*；*Jahrbuch des Collegium Carolinum*.

BohZ.→*Bohemia*; *Zeitschrift für Geschichte und Kultur der böhmischen Länder*.
EHR.→*Economic History Review*.
GuG.→*Geschichte und Gesellschaft*.
JbWG.→*Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte*.
JEEH.→*Journal of European Economic History*.
JEH.→*Journal of Economic History*.
PaP.→*Past & Present*.
ZfG.→*Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*.

Baltzarek, F. [1979], Zu den regionalen Ansätzen der frühen Industrialisierung in Europa; Mit Überlegungen zum Stellenwert der frühren Industrialisierung im Habsburgerstaat des 18. und 19. Jahrhunderts. in: Knittler, H. (Hg.), *Wirtschaft- und Sozialhistorische Beiträge*; *Festschrift für A. Hoffmann zum 75. Geburtstag*. Wien, S. 334–355.

Berend, I. T. / Ránki, G. [1982], *The European Periphery and Industrialization 1780–1914*. Budapest. (柴宜弘・柴理子・今井淳子・今村労訳 [1991]『ヨーロッパ周辺の近代 1780～1914』刀水書房。)

Berg, M. (ed.) [1991], *Markets and Manufacture in Early Industrial Europe*. London / New York.

Berg, M. / Hudson, P. [1992], Rehabilitating the Industrial Revolution. in: *EHR* 45–1, p. 24–50.

Bosl, K. (Hg.) [1974], *Handbuch der Geschichte der böhmischen Länder, Bd. 2*; *Die böhmischen Länder von der Hochblüte der Ständeherrschaft bis zum Erwachen eines modernen Nationalbewusstseins*. Stuttgart.

Cannadine, D. [1984], The Past and Present in the English Industrial Revolution 1880–1980. in: *PaP* 103, p. 131–172.

Čechura, J. [1995], Die Gutswirtschaft des Adels in Böhmen in der Epoche vor der Schlacht am Weißen Berg. in: *BohZ* 36–1, S. 1–18.

Cerman, M. [1993], Proto-industrialization in an Urban Environment; Vienna 1750–1857. in: *Continuity and Change* 8–2, p. 281–320.

Clarkson, L. A. [1985], *Proto-industrialization*; *The First Phase of Industrialization?* London. (鈴木健夫訳 [1993]『プロト工業化——工業化の第一局面？——』早稲田大学出版部。)

Coleman, D. C. [1983], Proto-Industrialization; A Concept too Many. in: *EHR* 2–36, p. 435–448.

Dickson, P. G. M. [1987], *Finance and Government under Maria Theresia 1740–1780*. Oxford.

Donth, H. H. (Hg.) [1993], *Rochlitz an der Iser und Harrachsdorf in der frühen*

Neuzeit; *Quellen zu Herrschaft und Alltag in einer ländlichen Industrialisierung im Riesengebirge.* München.

Freudenberger, H. [1960], The Woolen Goods Industry of the Habsburg Monarchy in the 18th Century. in: *JEH* 20-3, p. 383-406.

Freudenberger, H. [1963], *The Waldstein Woolen Mill*; *Noble Entrepreneurship in 18th Century Bohemia*. Soldiers Field/Boston/Massachusetts.

Freudenberger, H. [1966], Three Mercantilistic Proto-Factories. in: *BHR* 40, p. 167-189.

Freudenberger, H. [1968], Die Struktur der frühindustriellen Fabrik im Umriß; mit besonderer Berücksichtigung Böhmens. in: Fischer, W. (Hg.), *Wirtschafts- und Sozialgeschichtliche Probleme der frühen Industrialisierung*. Berlin, S. 413-433.

Freudenberger, H. [1981], Die proto-industrielle Entwicklungsphase in Österreich; Proto-Industrialisierung als sozialer Lernprozeß. in: Matis, H. (Hg.), *Von der Glückseligkeit des Staates*; *Staat, Wirtschaft und Gesellschaft in Österreich im Zeitalter des aufgeklärten Absolutismus*. Berlin, S. 355-381. (御園生眞訳 [1991]「オーストリアにおけるプロト工業的発展局面——社会的習得過程としてのプロト工業化——」篠塚・石坂・安元編訳, 323—354頁。)

Good, D. F. [1974], Stagnation and "Take-off" in Austria 1873-1913. in: *EHR* 2-27, p. 72-87.

Good, D. F. [1984], *The Economic Rise of the Habsburg Empire 1750-1914*. Berkeley/Los Angeles/London.

Gross, N. T. [1968], An Estimate of Industrial Product in Austria in 1841. in: *JEH* 28-1, p. 80-101.

Gross, N. T. [1971], Economic Growth and the Consumption of Coal in Austria and Hungary 1831-1913. in: *JEH* 31, p. 898-916.

Gross, N. T. [1973], The Industrial Revolution in the Habsburg Monarchy 1750-1914. in: Cipolla, C. M. (ed.), *The Fontana Economic History of Europe Vol. 4*; *The Emergence of Industrial Societies*. New York, p. 228-278.

Hassinger, H. [1961], Die Anfänge der Industrialisierung in den böhmischen Ländern. in: *BohJb* 2, S. 164-181.

Hassinger, H. [1964], Der Außenhandel der Habsburgermonarchie in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts. in: Lütge, F. (Hg.), *Die wirtschaftliche Situation in Deutschland und Österreich um die Wende vom 18. zum 19. Jahrhundert*. Stuttgart, S. 61-98.

Jackson, M. [1994], The Role of Enterprise in the Economic Development of

Central and Eastern Europe ; Some Issues of the Past and the Present. in : Klep, P. / Van Cauwenberghe, E. (eds.) : *Entrepreneurship and the Transformation of the Economy (10th–20th Centuries) ; Essays in Honour of H. Van der Wee*. Leuven, p. 275–293.

Jindra, Z. [1974], Zur Geschichte der Eisenerzeugung in Böhmen im 16. und 17. Jahrhundert. in : Kellenbenz, H. (Hg.), *Schwerpunkte der Eisengewinnung und Eisenverarbeitung in Europa 1500–1650*. Köln / Wien, S. 264–284.

Kaufhold, K. H. [1986], Gewerbelandschaften in der frühen Neuzeit (1650–1800). in : Pohl, H. (Hg.), S. 112–202.

Kisch, H. [1959], The Textile Industries in Silesia and the Rheinland ; A Comparative Study in Industrialization. in : *JEH* 19, p. 541–564. (柳沢治訳 [1991]「シュレージェンとラインラントの繊維工業——工業化の比較研究——」篠塚・石坂・安元編訳, 237—266頁。)

Klíma, A. [1955], *Manufakturní obdobi v Cechách*. Prague.

Klíma, A. [1965], The Domestic Industry and the Putting-out System (Verlags-System) in the Period of Transition from Feudalism to Capitalism. in : *Deuxième Conférence Internationale d'Histoire Économique, Aix-en-Provence 1962 ; vol. 2 ; Moyen Age et Temps Modernes*. p. 477–481.

Klíma, A. [1967], Die Textilmanufaktur in Böhmen des 18. Jahrhunderts. in : *Historica* 15, S. 123–181.

Klíma, A. [1974], The Role of Rural Industry in Bohemia in the 18th Century. in : *EHR* 2-27, p. 48–56.

Klíma, A. [1984], Glassmaking Industry and Trade in Bohemia in the 17th and 18th Centuries. in : *JEEH* 13-3, p. 499–520.

Klíma, A. [1989], Domestic Industry, Manufactory and Early Industrialization in Bohemia. in : *JEEH* 18-3, p. 509–527.

Klíma, A. [1993], Die Länder der bömischen Krone 1648–1850. in : Mieck, I. (Hg.), *Handbuch der europäischen Wirtschafts- und Sozialgeschichte, Bd. 4 ; Europäische Wirtschafts- und Sozialgeschichte von der Mitte des 17. Jahrhunderts bis zur Mitte des 19. Jahrhunderts*. Stuttgart, S. 688–719.

Komlos, J. [1983], *The Habsburg Monarchy as a Customs Union ; Economic Development in Austria-Hungary in the 19th Century*. Princeton / New Jersey.

Komlos, J. [1989], *Nutrition and Economic Development in the 18th-Century Habsburg Monarchy ; An Anthropometric History*. Princeton / New Jersey.

Komlos, J. (ed.) [1994], *Stature, Living Standards, and Economic Development ; Essays in Anthropometric History*. Chicago / London.

Kriedte, P. / Medick, H. / Schlumbohm, J. [1978], *Industrialisierung vor der*

Industrialisierung ; *Gewerbliche Warenproduktion auf dem Land in der Formationsperiode des Kapitalismus*. Göttingen.

Kriedte, P. / Medick, H. / Schlumbohm, J. [1992], Sozialgeschichte in der Erweiterung; Proto-Industrialisierung in der Verengung? Demographie, Sozialstruktur, moderne Hausindustrie; eine Zwischenbilanz der Proto-Industrialisierungs-Forschung. in : *GuG* 18, S. 70-87 (Teil I), S. 231-255 (Teil II).

Medick, H. [1976], Zur strukturellen Funktion von Haushalt und Familie im Übergang von der traditionellen Agrargesellschaft zum industriellen Kapitalismus ; die proto-industrielle Familienwirtschaft. in : Conze, W. (Hg.), *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas* ; *neue Forschungen*. Stuttgart, S. 254-282. (馬場哲訳 [1991]「伝統的社会から産業資本主義への移行における世帯と家族の構造的機能——プロト工業的家族——」篠塚・石坂・安元編訳, 29—63頁。)

Mendels, F. F. [1972], Proto-industrialization ; The First Phase of the Industrialization Process. in : *JEH* 32, p. 241-261. (石坂昭雄訳 [1991]「プロト工業化——工業化過程の第一局面——」篠塚・石坂・安元編訳, 1—28頁。)

Mendels, F. F. [1982], Proto-industrialization ; Theory and Reality. in : *8th International Economic History Congress* (*"A" Themes*). Budapest, p. 69-110. (田北廣道訳 [1987]「プロト工業化——理論と現実——」『商学論叢 (福岡大学)』32—1, 95—128頁。)

Millward, R. [1984], The Early Stages of European Industrialization ; Economic Organization under Serfdom. in : *Explorations in Economic History* 21, p. 406-428.

Mosser, A. [1981], Proto-Industrialisierung ; Zur Funktionalität eines Forschungsansatzes. in : Matis, H. (Hg.), *Von der Glückseligkeit des Staates* ; *Staat, Wirtschaft und Gesellschaft in Österreich im Zeitalter des aufgeklärten Absolutismus*. Berlin, S. 383-410.

Myška, M. [1979], Pre-Industrial Iron-Making in the Czech Lands ; The Labor Force and Produktion Relations circa 1350-circa 1840. in : *PaP* 82, p. 44-72.

Otruba, G. [1964], Die älteste Manufaktur- und Gewerbestatistik Böhmens. in : *BohJb* 5, S. 161-241.

Otruba, G. [1965], Anfänge und Verbreitung der böhmischen Manufakturen bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts (1820). in : *BohJb* 6, S. 230-331.

Pickl, O. [1986], Die Steiermark als Gewerbe- und Industrielandschaft vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart ; zur Entstehung moderner Industrie-

reviere in alten Fortschrittsregionen. in : Pohl, H. (Hg.), S. 16–38.

Pohl, H (Hg.) [1986], *Gewerbe- und Industrielandschaft vom Spätmittelalter bis ins 20. Jahrhundert*. Stuttgart.

Pollard, S. [1973], Industrialization and European Economy. in : *EHR* 2–26, p. 636–648.

Pollard, S. [1991], Regional Markets and National Developmant. in : Berg, M. (ed.), p. 29–56.

Prinz, F. (Hg.) [1993], *Deutsche Geschichte im Osten Europas ; Böhmen und Mähren*. Berlin.

Purš, J. [1960], The Industrial Revolution in the Czech Lands. in : *Historica* 2, p. 183–272.

Purš, J. [1965], Struktur und Dynamik der industriellen Entwicklung in Böhmen im letzten Viertel des 18. Jahrhunderts. in : *JbWG* I (S. 160–196), II (S. 103–124).

Quataert, J. H. [1988], A New View of Industrialization : "Protoindustry" or the Role of Small-Scale, Labor-Intensive Manufacture in the Capitalist Environment. in : *International Labor and Working-Class History* 33, p. 3–22.

Schremmer, E. [1981], Proto-Industrialization ; A Step towerd Industrialization ? in : *JEEH* 10–3, p. 653–670.

Schultz, H. [1983], Proto-Industrialisierung und Übergangsepoche vom Feudalismus zum Kapitalismus. in : *ZfG* 31, S. 1079–1091. (田北廣道訳 [1987]「『プロト工業化』と封建制から資本主義への移行」『商学論叢 (福岡大学)』32—2, 163—180頁。)

Stark, W. [1952], Die Abhängigkeit der gutsherrlichen Bauern Böhmens im 17. und 18. Jahrhundert. in : *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik* 164, S. 270–292 / 348–374 / 440–453.

Stromer, W. [1986], Gewerbereviere und Protoindustrien in Spätmittelalter bis zur Gegenwart. in : Pohl, H. (Hg.), S. 39–111.

Svoboda, G. J. [1991], The Foreign Trade of 18th Century Bohemia. in : *JEEH* 20–1, p. 93–123.

Tilly, C. / Tilly, L. / Tilly, R. [1991], European Economic and Social History in the 1990s. in : *JEEH* 20–3, p. 645–671.

Wolff, K. H. [1979], Guildmaster into Millhand ; The Industrialization of Linen and Cotton in Germany to 1850. in : *Textile History* 10, p. 7–74.

石坂昭雄 [1992]「ヨーロッパ経済」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣, 35—46頁。

大塚久雄・高橋幸八郎・松田智雄編著［1960］『西洋経済史講座Ⅰ—Ⅴ』岩波書店。
斎藤修［1985］『プロト工業化の時代——西欧と日本の比較史——』日本評論社。
佐藤勝則［1992］『オーストリア農民解放史研究——東中欧地域社会史研究序説——』多賀出版。
篠塚信義・石坂昭雄・安元稔編訳［1991］『西欧近代と農村工業』北海道大学図書刊行会。
進藤牧郎［1968］『ドイツ近代成立史』勁草書房。
田北廣道［1987］「ドイツ学界における『プロト工業化』研究の現状(1)——東ドイツ学界の場合——」『商学論叢（福岡大学）』32—2，133—162頁。
田北廣道［1996］「『プロト工業化』から『手工業地域』へ——第8回国際経済史会議以降の欧米学界——」『経済学研究（九州大学）』62（印刷中）。
二宮宏之［1984］「西欧のプロト工業化」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣，24—33頁。
馬場哲［1993］『ドイツ農村工業史——プロト工業化・地域・世界市場——』東京大学出版会。
御園生眞［1983］「19世紀中葉におけるベーメン（ボヘミア）機械制綿紡績業の成立」『経済学研究（北海道大学）』33—1，84—111頁。
御園生眞［1988］「19世紀前半のオーストリア＝ハンガリー間貿易——ハプスブルク帝国内の経済的統合に関する一考察——」『経済学研究（獨協大学）』51，25—50頁。
御園生眞［1989］「18世紀後半におけるベーメン（チェコ）麻織物工業の展開」『経済学研究（獨協大学）』52，25—50頁。
道重一郎［1993］「イギリス産業革命像の再検討——経済発展の連続性と断絶性をめぐって——」『土地制度史学』141，55—64頁。
森本芳樹編訳［1987］『西欧中世における都市と農村』九州大学出版会。
諸田実［1981］「一六，一七世紀東中部ドイツ麻織物工業における『ツンフトカウフ』」『商経論叢（神奈川大学）16，1—57頁。
湯沢威［1992］「イギリス経済史の再構築に向けて」『社会経済史学』58—1，7—29頁。